

「カラスの哭く^{とき}刻」

—初稿—

2025/10/09

山極 瞭一朗

〈人物表〉

烏丸 からすま さちか

(25)
桜学校・塾長

栗原 あわら 俊司 しゅんじ

(25)
さちかの同僚

リマ (15)
生徒

アサ (18)
生徒

少女1・2・3

1. 墓地（昼）

どしゃぶりの雨。

烏丸さちか（25）、墓前に花束を置く。

さちか「……」

さちか、目を閉じ、合掌。

その頬は歪み、ピクピクとひりつく。心を落ち着けるように深呼吸。そして、徐に目を開く。

2. ビルの屋上（夜）

ロリータ系ファッションのリマ（15）、柵にもたれかかる。

リマ 「待って……私何もしてない……」

さちか、ぎゅっと拳を握る。

リマ 「お願い……殺さないで……」

さちか、リマに掴みかかり、

さちか「知ってること話して、そしたら」

リマ 「あの人なら！」

さちか、満足そうに頷いて、薄く口角をあげる。

3. ビル近くの道（夜）

リマが血を流して倒れている。

周囲には人ばかり。

さちか、ビルから出て、颯爽と立ち去る。

4. 繁華街・実景（朝）

道端で屯する酩酊者。

路上で喫煙する若者。

警察に連行される不良。など。

5. 道1（朝）

散らかったゴミ。それを漁るカラスたち。

1羽のカラスが鳴く。

6. 雑居ビル・廊下（朝）

栗原俊司（25）、指先で鍵をくるくる回しながら来る。部屋の前に着くと、鍵を開け、入る。

ドアノブに、『フリースクール桜学校』の看板。

7. 桜学校・室内（朝）

こぢんまりとしたワンルーム。長机がランダムに並べられている。

本棚には参考書がずらり。

受付には写真、さちかと栗原が写る。

ソファで眠るさちか、むくっと起き上がって、

さちか「ふわぁ」

と、大きく伸びをする。

栗原、ピタッと立ち止まって、

栗原「いたのかよ」

さちか「おはよ」

栗原「また泊まり？」

さちか「家帰っても誰もいない。寝るだけ」

と、冷蔵庫から水を取り出す。

さちか「ここにいるのと大差ない」

栗原、ピクッと頬を歪める。

さちか「飲む？」

栗原「ああ、うん」

さちか、ペットボトルを投げる。

栗原、キャッチ。

さちか、グッドサイン。

さちか「てか早いね」

栗原「ニュース見た」

さちか「ん？」

栗原「死んだって、リマちゃん」

さちか、水をぐいと飲み干して、

さちか「そう」

と、ペットボトルを潰す。

栗原「また殺ったのか」

さちか、ふっと笑って、首を傾げる。

栗原 「どうして突き落とした？」

さちか 「ナイフでぶっ刺した方がよかった？」

栗原 「今までは隠してた」

さちか 「もう隠す必要はない。これで動き出す」

栗原 「どういう——」

さちか 「大丈夫大丈夫。シュンには迷惑かけないから。安心して」と、出ていく。

栗原 「さちか……」

栗原、ペットボトルを握りしめる。

8. 道 1 (昼)

カラスはごみを漁っている。

向こうからさちかがやってくる、カラスを認めて立ち止まる。

ふと、カラスがさちかを見つめる。

交錯するさちかとカラスの視線。

9.

桜学校・室内 (昼)

スーツケースが隅にまとめて置かれている。

少女たちは勉強している。その中にアサ(18)。

栗原は指導中。

さちか、隅で少女たちを見渡している。

少女1 「ねえ、リマが死んだってほんと？」

栗原、さちかを一瞥して、

栗原 「うん……」

少女2 「殺されたんでしょ？」

少女1 「リマが？ どうして？」

少女2 「知らないよ」

少女3 「恨まれてたんじゃない？」

アサ、刹那頬を歪める。

さちか、さっとアサを見る。

少女3 「やばいことに関わってたって噂あったよ」

少女1 「やばいこと？」

少女3 「オジに結構な金——」

栗原 「はい、そこまで。今授業中な」

少女1・2・3 「はい」

アサ、ペンをぎゅっと握る。

さちか、アサから視線を逸らす。窓の外を見つめて、ニタッと笑う。

10.

道2（夕）

人通りの多い通り。

柱の陰に隠れて、アサ、電話している。

アサ 「はい、そうです……。もしかしたら気づかれたかもって。

ひまりの家族のこと——」

アサ、ビクツとして、振り返る。

行き交う人々。

アサ、ホツとして、

アサ 「はい、死んだ人は全員ひまりの件に。……。私どうすれば

——」

アサ、ハツとして、正面に向き直る。

眼前にさちか。

アサ 「先生……」

さちか 「アサちゃん？」

アサ 「（スマホに）すみません。また連絡します」

と、電話を切る。

さちか 「ごめん、大丈夫だった？」

アサ 「あ、はい。すいません。……。先生、教室は？」

さちか 「休憩中」

アサ 「そうなんですネ」

さちか 「今から戻るけど、来る？」

アサ 「ああ……」

さちか 「どうかした？ たまには私が教えるよ」

アサ 「あ、いえ……。行ってもいいですか？」

さちか、にっこりと笑って、歩き出す。

アサ、スマホをきゅっと握り、後に続く。

夕日が差している。

さちかとアサ、入る

アサ 「みんなは？」

さちか 「今日は帰るって。カラオケ行くとかなんとか。自由だよ
ね」

アサ、苦笑して席に着く。

さちか、冷蔵庫から水を出す。アサに渡して、

さちか 「これしかないけど」

アサ 「ありがとうございます」

さちか 「大丈夫？ トラブルとか、そういうの」

アサ 「……はい」

さちか 「ほんと？」

アサ 「多分、なんとかかなると思います……」

と、水を飲む。

さちか、飲んだのを確認して、席に着く。

アサ 「先生って、優しいですね」

さちか 「そう？」

アサ 「私たちの為に勉強教えてくれて。相談にも乗ってくれて」

さちか 「私にも夢があるからね。win winだよ」

アサ 「夢？」

さちか、にこっと笑って、水を飲む。

アサ 「何ですか？」

さちか 「……私、妹いてさ」

アサ 「初耳です」

さちか 「初めて言ったし、これが最期」

アサ 「え……」

さちか、悲しそうにふっと笑って、

さちか 「ひまりっていうんだ」

アサ、大きく目を見張る。そして焦ってスマホを取り出し、出ていこうとする。

扉の前に、栗原。

さちか 「シュン……」

アサ 「せ、先生……？」

栗原、穏やかな笑みをアサに向けて、その手からさっとスマホを奪う。すかさずポケットにしまつて、

栗原 「動くってそういうことか」

アサ、震えながらさちかと栗原を交互に見渡す。
向こうに非常口。

アサ、咄嗟に駆け出す。

栗原、アサを掴んで抱きしめる。

さちか 「シユン……」

アサの腹からポタポタと血が滴り落ちる。

栗原、アサを突き飛ばす。その手にはナイフが握られている。

アサ、腹を抱えてうずくまる。

床に広がっていく真っ赤な血。

栗原 「約束しただろ。俺たちは一蓮托生だ」

さちか 「でも……」

栗原 「もうひとりで動くな。見つけるんだろ、ひまりちゃんを殺した本当の悪を」

さちか 「……そのためにこの街にいる」

さちか、栗原に近づき、そっとナイフを手取る。

そして無情な目でアサを見下ろす。

アサ、首を左右に振って、必死に懇願。

アサ 「お、お願い。知ってること全部話すから」

さちか、ふっと笑って、アサの前にしゃがむ。

さちか 「電話の相手に聞くね」

アサ 「……こ、殺さないで」

さちか 「それは無理。決めてるから、関わった人間全員殺すって」
そして無慈悲にナイフを振り下ろす。
ぴしゃっと、さちかの頬に返り血が飛び散る。

（おわり）